

随想

## 有楽椿

大重 晶圓

半世紀近く前から、毎年11月頃になると、上品なピンク色の花をつけ始め、寒い冬の庭を春先まで、次々と咲き続けて楽しませてくれる。

この有楽椿は、ウラクツバキ 佗助の仲間、ワビスケ で、スキヤ 数寄屋やタロウカジャ 太郎冠者と同一と見なされたり、また独立のものと見なされたりしてきた。

茶道有楽流の初祖である織田有楽齋が愛でたことから、この名がつけたいらしい。織田信長の末弟であり、大阪冬の陣に豊臣方に与したが、後に武道を嫌い、堺・京都などにいんせい 隠棲し茶人として知られるようになった。洛北衣笠山麓の等持院には樹高十数メートルに及ぶ巨樹がある。樹齢350年から400年になるという。有楽齋の時代と合致するものである。寺は、ワビスケとして紹介しているが、植物学の専門家は明らかに有楽椿だと言っている。

この有楽齋は、織田信秀の11番目の子息として誕生した。数え年5歳で父を失ってから13歳年上の兄信長に養育された。信長は後に有楽齋となる源五を武人として鍛えるとともに、諸学諸芸を身につけさせ、その資質を見抜いて本格的に茶の湯を学ばせた。源五は幼少にして武野紹鷗じょうおうに師事したが、



有楽椿（著者の庭にて）

9歳の時、紹鷗が没した。同門の兄弟子には、後に千利休と呼ばれる、25歳年上の田中宗易がいた。

有楽斎は信長、秀吉、家康の三君に仕えて、戦乱の世を巧みに生き抜き、晩年は京都建仁寺に正伝院を営み、茶の湯三昧の生活を送りながら75歳で没した。

この有楽流の流れを汲む流派が四つあり、そのうちの水戸有楽流は、人間禅道場の有楽流として、現在も継承されている。この流派の継承者になるための欠かせない条件は、茶道の奥義を極めるとともに、禅の見性という悟りの境地を得る必要があるという。

近年この有楽流茶道の御家元十二世を継いだのは立田寿々女女史で、十三世は立田より子女史、十四世は三浦瑠璃子女史である。この御三方は、夫（注：大重月桂老師）が長年ご指導を仰いだ人間禅教団の初代総裁立田英山老大師の、それぞれお母様、奥様、お嬢様にあたる。

縁あって、この英山老大師ご夫妻に頂いた有楽椿の1尺足らずの苗2本を庭の東側と南側に植えたものが、どちらも見事に成長している。高いもので5mを優に越え、幹も太く、数え切れないほどの花をつけ賑やかである。窓辺から眺めながら、これを下さった方を偲び、当時をこの上もなく懐かしく思い出している。

この花を家族に取ってきてもらって、今自室で眺めている。蕾の先端の開きかけはワビスケに似ていて趣があり、いじらしく魅力的である。開花の最も美しい時は花びらの先端径が3cm位まで開いた頃で、花の根元の茎のところにある2枚の葉はほぼ対生で、開花を守っているように見える姿には感動すら覚える。葉は椿特有の厚みとつやがあるが、他の椿の葉より少し細く長い。花には香りがある。

結実ににくく、実生はむつかしいため接ぎ木で増やすといわれるが、木によってはよく結実し、よく発芽するものもあるようだ。

人間禅道場の有楽流茶道は、水戸藩内で伝承されてきた系統であり、老大師のお母様が師事された笠間政之先生は元水戸藩士で、第十代水戸藩主徳川慶篤の茶道師範でもあった。明治になってから東京へ出られ、有楽流茶道家元として多くの人々を指導され、弟子3,000人といわれた方だという。

立田家は、江戸時代には幕府の要職にあったお家で、明治期には笠間家と立田家は、水戸邸のある同じ東京本所区内にあったという。

ところで、有楽斎の遺愛のものといわれる有楽椿の巨樹が2本、京都市東山区高台寺の月真院の庭にある。高さ7m位、地上から1mのところ、周り86cmのものである。

永年にわたり毎年冬の庭をずっと飾ってきてくれた、由緒あるこの有楽椿にも、また稀に見る人たちとの出会いに恵まれたことにも感謝している。有楽流茶道の歴史に思いを馳せ、有楽斎の遺愛の椿もぜひ一度眺めたいものである。

### 参考文献

『椿 - 花と文化』京都園芸倶楽部著（誠文堂新光社。昭和44年発行。浅井敬太郎、北村四郎、嶋田玄弥、渡辺武執筆分）

『禅』25号・26号・27号連載の「人間禅道場の有楽流（一）～（三）」林裕子著（人間禅出版部。平成19～20年発行）

（本稿は『女人随筆』117号から転載させていただきました）

### 著者プロフィール



おおちょうしょうえん

大重晶圓（本名 / 千寿子）

大正4年、岡山県生まれ。『女人随筆』同人。

昭和10年、両忘協会立田英山老師に入門。軒号 / 荷葉軒。